

## 九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について

中條, 順子  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/16297>

---

出版情報 : 文献探究. 4, pp.26-34, 1979-06-03. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

## 九州大学附属図書館蔵

### 『伊勢物語聞書』について

中條 順子

九州大学附属図書館に、『伊勢物語聞書』という外題をもつ一冊の写本が蔵されている。ところが、その内容をみると、外題にいう伊勢物語の聞書だけでなく、前半部分にいまひとつ異なる内容のものが合わせて収められている。(分類番号 必イ33)

この写本に関しては、伊勢物語の古注釈をほぼ網羅した大津有一氏の『伊勢物語古注釈の研究』にその存在が紹介されているが、伊勢物語の注が後述する如くきわめて簡略であるためであろうか、首尾の文章をあげるにとどめてある。ことに前半部分については、伊勢物語の注とは無関係な内容のため、当然のことではあるが言及されていない。

本稿では、この本の概要について、とくに外題と異なる前半部分を中心に、少しく述べてみたい。

この本の書誌は次の通りである。

袋綴一冊、縦三〇・七程、横二二・三程。表紙左上

に打付書で「伊勢物語聞書」と墨書。原装釘。殊更に表紙をつけず、本文の共紙(鳥の子)を前後にあてて外題を記している。墨付は三八丁。遊紙は全く最末紙が裏表紙の役目をしている。前述の如く、前半一三丁と後半二五丁とは内容が異なり、後半部分が外題に云う伊勢物語の聞書である。内容は変わるが、三八丁も通して一筆で書かれており、両者の間に料紙や墨色等の変化は見られない。一面十行書で、一行二〇字前後、漢字平仮名で書かれ、書入・ミセケチ・貼紙等は無い。近世初中期の写と思われるが、奥書識語の類はない。墨付才一丁表の上部に「本間文庫記」「寺尾寿所蔵」、右下端に「音無文庫」の印記があることから、本書が昭和五年三月九州大学に移管された故寺尾寿博士の旧蔵書(音無文庫)の一本であることがわかる。注1

以上の書誌をみる限りでは、内容の異なる前半部分と後半部分は、書写時からすでにいっしょに取り扱われたものようである。

では次にその内容について見ていくこととする。

二

先ず、前半一三丁について述べる。内題はなく、次の様な文章をはじめ。

むかしかんぬんのさ大しんふゆつくのきやうと申せし人ありさひあひの御むすめ若ひとりおはしましけり世の中におしんなる事「まんようのうたに人のふしんなとしけること」よろつこのことなともおほうちをしさひきぬ」なとしたたむるやうのことくさきにつけて「人のしらぬなの有ことよろつめしつかふもの」になのあることともひとつかきにこま／＼と」あそはしひめ君にまひらつさせたまふこれ」世の中のひとしとおほろけに人しらす」よく／＼ おんみつしてつたふへしちいんには」みすへし」

そしてすぐに「かひおほひの事（へと統りていく。言うなれば「序」のようなこの冒頭部分によると、この書は、閑院の左大臣冬嗣卿が最愛の一人娘のために、世の中の不審事、内裏のこと、人の知らぬ名、召使うもの名などを、細々と書きあらわしたものであるという。本文中にも「——とふゆつく

のきやう)は申されしなり」(九オ) などという文が見られることから、この書が藤原冬嗣に仮託した書であることがわかる。本文は、

- (一ウ) 「かひおほひの事」
- (四オ) 「おほうちのみつのほそとのと申事」
- (四ウ) 「おほうちのてんのなのこと」
- (五ウ) 「ねうはうのまゆつくる事」
- (六オ) 「ふしみつと申事」
- (六ウ) 「かりそのもおりたらん物をはこそてといふへし」
- (七オ) 「みそをかうといひむしと申事」
- (八オ) 「しほ」の事」
- (八ウ) 「大くちはかまぬふやうの事」
- (九オ) 「硯の名をは」
- (九ウ) 「筆は」
- (ク) 「墨は」
- (ク) 「紙は」
- (ク) 「ふみのな」
- (十オ) 「にしきとりとは」 (以下——とり)
- (十ウ) 「まつよくさとは」 (以下——くさ)
- (十三ウ) 「正月は」 (以下——月)

( ) 「」は私に補ったもの

という順序で書かれており、末尾は、

此十二月のなほひそかにしる月なりたれか  
これをよくしらんやひすへし

で終わっている。

冬嗣の作という体裁をとる本書が、いかなる本であるのか、以下、本文に即して見てみよう。

### 三

本文の最初に位置する(一、かひおほひのこと)は、かひおほひ(貝合)の由来とその方法を記すが、要約すると次の如くである。すなわち、

白樂天が日本人の智恵をはかりに唐土からやって来た。これに対し、住吉大明神が翁の姿で白樂天と対峙した。白樂天が「青苔佩衣懸巖肩、白雲似帶迴山腰」とよみかけたのに対し、「我朝には歌と申すことあり」といつて住吉明神は「こけ衣きたるいはほほさもなくてきぬく山のをひるするりな」と和歌で返した。日本人の智恵はつりかたし、と帰ろうとした樂天を、住吉明神は更に、住吉の浦へ召したところ、住吉の浜の貝の殻共が、明神がむくり(蒙を)を退治した合戦の有様のま

ねをじて樂天に見せた。樂天は、貝の殻さえ賢く合戦のまねをする。まして人は申すに及ばじ、とみて唐土へ帰っていった。貝おほひはこの貝の殻の合戦のまねから始まったものであり、貝おほひの貝に必ず住吉の絵をかくのもかかる由来に依るのである。又、樂天のやってきた甲午の日に因んで午の日に貝おほひを始めるのである。

白樂天が日本へやってきたという(二)は、後江相公の平陸和帝の夢に現れた話などでも伝えられているが、やってきて住吉明神と対峙した話は、臥雲日件録・広益俗説辨・類聚名物考などに「俗説」として見える。いずれもきわめて簡略な記述であるが、なかでも本書の記述に近いと思われる「広益俗説辨」并「沢長秀著、享保三刊、統国民文庫所収」を引いておこう。

#### 住吉大明神白樂天青苔白雲の詩歌の説

俗説云、唐の白樂天日本の人の智恵をはからんとて渡りけるに、住吉大明神老翁と現じ釣をたれておほしければ、樂天舟をよせて青苔佩衣懸巖肩白雲似帶迴山腰と詠しけるに老翁歌を以て和して云く、苔衣きたる巖はさもあらで、きぬ着ぬ山の帯をするのなと有りしかば樂天驚



ねについて記されている。次に、この項目について見ることとする

四

才四項目(一、ねうはうのまゆつくる事)と井五項目(一、ふしかつと申事)については、きわめて近い内容を有すると考えられる書物があるので、本書の記事と並行してあげてみる。

(本書)

一、ねうはうのまゆつくる事

おほうちにてはまゆはらふと申なり。たゝのところにたはつくといふ。をこのまゆとはみきよりつくるへし。ねうはうはひたりよりつくるへし。むかしてんちくにはうしと申すきさきをほします。ひしんたひいちなり。ひたひにうすくろさけけあり。なをいつくしかりしによりてまゆはつくりはしめたる

眉拂

(守齋隨筆  
所引 婦人養尊)

婦人養尊に云くある  
老女の予に物語しける  
は大内にては眉はらふ  
と申なり。地下にてはつ  
くると云ふ。男の眉をば  
右よりつくるべし。女房  
は左よりつくるべしと。  
又、左右の眉は日月に  
たとへれば、月のさほ  
り有る暁は東に向つ  
て眉つくるべからずとい

とも申なり。又日月にてましますともいへり。月のさほりの有ときのまゆひかしにむかひてつくるべからず。まゆにあまたのなあり。でんちくまゆといふあり。これはほうしかひたひのすかたなり。うくひすまゆ。三か月まゆ。わすれまゆ。かすままゆ。大かたまゆ。きしたてまゆ。これはおさなき人につくるまゆなり。からまゆ。これはいたりてとしたけにつくるまゆなり。あはれまへてみきよりつくりはしむべからず。  
一、ふしかつと申事  
つくるかねなり。ぬきすのまつとも申なり。春のはしめにつくるかねは三とけんらうちんにたむくるなり。おはくろとはくけより申ならはかしたり。おほうちにはふしかつと申たまふけすはつけかねといふへし。

へり。日本にても眉に種々の名あり。鬢眉。みかづき眉。護眉。霞眉。大形みき立眉。是はをさなき人につくる眉なりと。又重眉。是は至りて年たけたる人に作る眉なりと。相かまへて右より作り初むべからざるよし(へり)。  
鐵漿つくる事も春の初めにつくるには、堅牢地神に手向くべし。おはぐろとは公家方より申し習はしたり。是を内裏にてはふし水と申し給ふ。下種にはつけかねと云ふと物語によりて今爰に書きつく。

一見して明らかなるように、本書の記載は、安斎  
 随筆引くところの、婦人養草の文章と内容と表  
 現に至るまで重なる部分が多い。ただ、本書の  
 記載中、「天竺のほうし」関係箇所（傍線①②）  
 は、安斎随筆引く婦人養草に見えないが、おそ  
 らくは、安斎が引用する際に簡略化したためた  
 生じたものと考えてよいであろう。本来は、婦人  
 養草の本文を直前に引いて比較するのが望まし  
 いが、版本の所在が限られており、今は安斎随  
 筆に引用されている文章から推定を加えるに  
 とめておきたい。

婦人養草は、女中詞を多く収めた女訓物とし  
 ては、はやい頃の書物である。梅塙散人の著で貞  
 享三年の自序をもち、元禄二年に版行された。  
 松井利彦氏は「女中ことば集とその所収語の性格」  
 （国語国文三八二号）において、婦人養草と板  
 本の字譜の中で、女中詞・女中言葉・女言葉と総称  
 と、女室宗記との中間に位置づけておられる。  
 婦人養草が本書とどれほどの共通部分を有するか  
 は定かではないけれども、女房詞・女中詞に類する  
 異名が、本書の何ワりの部分を占めていることは指  
 摘できるところに思う。教例を挙げてみよう。

(七ウ) おほうちのことはにはひくらしとみそを。  
 申ならけりたり なかほとの人(早晩)むしと  
 申なり したのことはにかうと申

(ハオ) しほをひなのはなとはことほり(早晩)  
 しろ物とはちといはれす……下らうの  
 もの御いたの物といひしほをおいたと  
 申なり これことわりあり

右のように、おほうち・なかほど・した(下らう)  
 と区別して異名を記す他、(九ウ)から以降は、

——とり という異名を有するもの

24

——くさ という異名を有するもの

60

を列挙する。具條例を示すと

一「ちよりとりは」としとりなり

一「いさゝめとりは」はとわり

一「ひとりくさ、つくしなり

一「かこしくさ、ふしなり」ふたさくことも申也

一「ひかりくさ、竹の事也

のように記されている。

このような表記は、女中詞の類にはしばしば見られるもので、たとえば、『女房詞の研究』巻末に収められた資料篇の中の、女中詞(東大本)でも、

——草 22例 ——鳥 5例ほど見える。

又、同じく『女房詞の研究』所載の、女房詞の最初の文献「海人簿券」から、近代女官言葉までの諸資料にみられる語彙を集めた、語彙分類表で、本書中の語彙を検査すると、

かき —— むし・ひくらし

しほ —— 涙の花 お白物

つくるかね —— ねます水・おふし水・おみはぐろ

つけかね

などの項で合致するのは、(女中言葉・女中詞・女重宝記)の語彙であった。年代的には、女重宝記(元禄五年刊)・女中言葉(正徳二年)・女中詞(享保年間)の成立であり、これに先の『婦人巻』(貞享三年成稿、元禄二年刊)を加えて、ほぼこの頃の、これらの資料と本書との間に共通点を見出すことができ、(という)ことを指摘するのとらめておく。

本書の冒頭の文章に述べられている本書を一貫す

る建前、即ち「冬嗣が秀娘のために書き記したということ」が、本書の「内裏の女房の心儀や申している」と異名を多く収めているのは、きわめて当然のことやわけであるが、では、本書は、女中詞の系統にある写本の一つとして位置づけられてよいか、とすると、いささか疑問をおぼえるのである。

その理由は、女房詞女中詞ではかなりの部分とある諸道具や食物の異名が殆んど見られないこと、又、必ずといってよい程、収められ、その特徴ともいえる「もじ」などが一例も見えず、接頭語「お」のつく語も二例程度にすぎず、サカすまること、ひとである。あるいは、女房詞から女中詞へ流れる直系で、口く、大和詞異名俗説尽とでもいうべき性格のものかとも思う)が、手紙(手紙)を見出しえない現在、性急に結論を出すことは差し控えたいと思う。

## 五

ここでは、本書後半部分二五丁について述べてみたい。首に「伊勢物語聞書」という内題を記す。外題とは書体異なるため比較が難しく極めがたいが、墨筆のように思われる。

大津有一氏が、『伊勢物語古註釈の研究』で言わ



れているように、非常に簡単な注である。勢語の本  
文はあげずに、語の解釈等を列挙している。初段と  
最終段の紹介は、大津氏によってすまになされてい  
ら、ここでは、別の段をあげておこう。

### 八十二段

一、又人のうたと云は有つねの事也

二、めするとは見る事也

三、七夕つめとはたなはたのつま事也

四、すし玉ふとはきんする事也

### 八十三段

一、犬とのこもりとはきよしんなる事云なり

### 八十四段

一、まうすとはみまう事也

二、しはくとはかすくといふ事也

三、とんとははせい事頗欵

### 八十五段八十六段

一、ことたつとはしうげんの事也

二、ひねもすとは一日の事なり

### 八十七段

一、あひい(へり)とはじやつこんの事也

全体にわたってこのように簡略なわけであるが、  
巻末の段数が(段数の中で本文はない)、一、二  
六段となっている。そこで、注意して調べてみると、  
上にあげた「八十五段 八十六段」の注は八十  
五段の注にあたり、次の「八十七段」が実は八  
十六段の注であることがわかる。八十五・六・七段  
あたりには、段数に分かれようような段はなく、本文  
自体には段数のすれが生じる要因は見あたらな  
いようである。ここは、八十七段以降、終わりまで  
一段ずつずれた理由は書写者の側にあると考えて  
もよいかもしれない。となると、講書の席で書きと  
めた原書ではなく転写されたものとみることもで  
きよう。  
原書の

聞書の内容については、とりたてて注目すべき  
注や珍しい注を見出しえないようであるが、しい  
て、本聞書の接徴をあげるとすれば、引歌にあるよ  
うに思われる。この点について以下詳しく述べてみ  
よう。

伊勢物語聞書の項目は全体で三三七項ある中で  
引歌をひいた項は、一割、三〇項にもなる。注の  
うちの一到をも引歌を記すということは、やはり、

相当に多いと言えようし、又、全体の作中の引歌の  
重視の程もうかがえる。

これら 三〇の引歌を 愚見抄・肖聞抄・伊  
勢物語御抄・惟清抄・関鏡抄 に引かれた  
歌と比較すると、重複するものか、一四首見出さ  
れる。古注の本流であり、又集大成ともいえるこれ  
らの注釈書にも見られる引歌は、さほど目新しい  
ものでないが、残る一六首もの引歌は、これらの  
注に見えないのは、いさゝか興味あるところである。  
所見のない歌の中から教例を示しておく。

ひたちなる水のなまきのつき草子の

うつれは駒のつまそ有りけり (二二段)

里のなの家をもつとも花かたみ

かたみに出てすみれをそつむ (二八段)

あな恋し行てやみまし津の国

今も有こふ 浦のほつ鳩 (五〇段)

これら一六首の作中で、一四段に、くたかけの引歌  
として出されている歌、

夏の夜の下もめ鳥のさけなさに

夜ふみに鳴てせなをやりつゝ

の歌は、大津有一氏蔵の伊勢物語周書（『伊勢物  
語古注釈の研究』三五九―六一頁所収）にも載せられ  
ているという。

本周書の特徴をまとめると、項目数の割に、  
引歌が多く、しかも、主要なる古注釈書には  
見えない歌も相当数存する、という点にな  
るのである。

以上、「伊勢物語周書」という外題の一本を、前  
半十三丁、後半二五丁にわけて、それづくについて  
内容の概略を述べてきた。

前半と後半は前述の如く、一筆で書かれてはいるが、  
内容は全く異なるものがあり、前半は藤原冬嗣に  
仮託された偽書というだけで、その成立年代や作者  
について知る手掛りは見出し難いようである。私と  
しては、一和、女中詞・俗説・異名等を、女訓物や  
随筆等から抜粋し、集めて、一本の偽書としてこの  
体裁を整えたものではないかと考える。【二五頁へ続く】